

キャリアデザイン学部における教育・研究を振り返る

MATHUSHIMA, Eiko / 松島, 英子

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

5

(終了ページ / End Page)

15

(発行年 / Year)

2014-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009656>

松島英子先生退職記念

キャリアデザイン学部における教育・研究を振り返る

Retracing my Education and Researches at the Faculty of Lifelong Learning and Career Studies

法政大学キャリアデザイン学部 教授 松島 英子

私は2013年度末をもって、2004年4月より勤務してきた法政大学キャリアデザイン学部を定年退職することとなる。これまで10年間行ってきた教育・研究について手短かに振り返ってみたい。

1. 就任以前

法政大学キャリアデザイン学部教員に就任する以前には、富山大学人文学部助教授（1982-1989）、中近東文化センター研究員（1989-1995）、中京女子大学アジア文化学科教授（1995-1999）を歴任した。

富山大学人文学部では文化構造論学科担当、中京女子大学ではアジア文化関係の諸科目を担当するなど、文化の諸現象を幅広くとりあげ、比較対照・文化交流・分析と理論化を内容とする講義・演習を取り扱ってきた。私自身の専門研究領域は古代オリエント、特にメソポタミア文化史であるが、専門研究にアカデミックな手法で取り組む一方で、自分の研究対象・内容を古今東西の世界の中に位置づけ、相対化することがあらゆる意味で必須であることを、度々痛感してきた。そのため多文化への視野・視点を持ち続けることを心がけ、実践してきた心算である。後述するが、着任以前の時期に相当数の研究論文のほか、一般の教養人に読まれることを期待する数点の著書・翻訳書を刊行している。また、中近東文化センター研究員時代には考古調査および博物館調査のため毎年夏期にトルコを訪れ、アンカラでの調査のほか、中央アナトリアの風土・文化にふれている。トルコへの出張の傍ら、留学生時代を過ごしたフラン

6 法政大学キャリアデザイン学部紀要第11号

スに立ち寄り、あるいはイギリス・ドイツに赴いて研究資料を収集した研究交流を行った。このような経歴の中で、中近東文化、ヨーロッパ文化そして日本文化をまたぐ、あるいは対比する、数多くの関心事項を蓄積してきたと自負している。

2. 着任以降

2.1 教育活動

着任以来二度にわたってカリキュラム改訂が行われたため、その都度担当科目名のみならず、履修年次、履修方法が変更となっている。記述の煩雑さと不正確さを防ぐため、任意に科目を選んで言及したい。

着任したのは2004年4月であるが、これに先立って、2003年4月から非常勤講師の資格で「世界の生活文化基礎演習」を担当している。

さて新設二年目のキャリアデザイン学部に着任してからは、学部の授業のうち、学部が開設する基礎科目あるいは必修相当授業をいくつか担当した。「基礎ゼミ」、「キャリア相談事前指導（後に科目名変更）」などで、前者は毎年、後者は年度によってである。また、「キャリアデザイン学入門（文化）」、「文化入門Ⅰ」が学部教員のローテーションで運営されていた時期に、それぞれ年度によって異なるが半期で2-4回程度の授業を担当した。「文化入門Ⅰ」の場合、文化概念・定住社会と非定住社会の生活文化について、紹介・考察をおこなった。世界の生活文化に様々な側面があることを、授業で伝えることを心がけた。

専門科目は、新設時は一年生から履修できる「世界の生活文化基礎演習」を担当したが、これはしばらくのちに二年生から履修する「キャリアデザイン学基礎演習」（文化）に吸収された。2013年度からはさらに専門ゼミ「キャリアデザイン学演習」2年生バージョンとなっている。「世界の生活文化基礎演習」の時期には、生活文化を見つめ直すことに主眼をおいたため、一年生にはやや難しかったかもしれないが、科目の狙いや性格は学生にとって分かりやすかったと思う。その点では改訂が進むにつれやや輪郭がぼやけた感がある。専門ゼミ「キャリアデザイン学演習」では、「生活文化」をキーワードにゼミ募集・運営を行い、この概念を重視している。ただし学生の研究テーマ選びには、

地域・時代の制約をかけず、自主的に生活文化に取り組むことを方針としている。

講義科目に関しては、自分の専門領域あるいは周辺領域から題材を集め紹介しつつも、それらをたんなる知識として伝えるのではなく、現代に生きる我々自身を見つめ理解し、キャリアについて考える一助にすることを念頭に置きながら内容を構成した。二度のカリキュラム改訂後の2013年に担当したに科目について、以下にシラバスを紹介する。特に重視した概念は、多文化社会、文化交流、そして現代社会・文化のルーツである。私が専門領域としている古代オリエント社会は、現代の人間生活の根幹を形成する重要な技術や概念の多くを生み出した世界である。文字文化は言うに及ばず、回転運動の利用（車・輻輳・紡錘器具の発明）、鉄の発見と利用・騎馬技術・火を利用する諸技術（土器・陶器・ガラス・パン焼きなどなど）、建築の諸技術（アーチやドーム）がある。さらには、世界の有力宗教は仏教を除いてすべてこの地で発生した。仏教さえイラン高原を故郷とするゾロアスター教の来世思想に影響を受けている。このようなことに日本ではあまり関心が寄せられていない。大学関係者の間でも十分理解が行き届いていないようである。私としてはルーツに言及し、名もない人々が積み重ねた歴史に支えられて現代人の生活が成り立っていることを認識してもらおうこと、それがキャリアデザインを考える一助になることを願ってきた。

多文化社会論 I

今日の社会はさまざまな意味でグローバル化している。日本に住んでいても、世界各地で起きている多種多様な出来事と無関係には暮らせない。ユーラシア大陸を対象として、言語・民族・宗教・生業・生活習慣など、さまざまな要素を今一度見直しつつ、多文化理解の道を開き、現代人としてキャリアを考えるための一助とする。また、人間とそれを取り巻く環境の問題も考える。

【授業の到達目標】われわれはともすると自分の周囲、せいぜい日本の内部に視野を限定しがちだが、そこをこえて世界をみわたす習慣、そして日本と世界が直結していることを意識する習慣を身につけ、キャリア形成につなげることが目標である。

【授業の概要と方法】基本的に講義形式で行う。まずは、われわれの生活文化世界を規定する基礎概念について定義付けをすることから始め、ユーラシアに

8 法政大学キャリアデザイン学部紀要第11号

暮らす人々の生活形態とその文化について具体的に見て行く。歴史的な背景についても言及する。そのあと、日本と日本人について、固定概念を捨てあらためて考えてみる。受講者の人数によるが、可能な限り教員との意見交換の方策を工夫し、すくなくともリアクションペーパーで質問・意見等をつる。

【授業計画】

| 回 | テーマ | 内容 |
|------|-----------------|--|
| 第1回 | ガイダンス | 授業の進め方、大まかな内容と方法などを概説する。 |
| 第2回 | 概念規定その1 (文化) | 人間固有の文化と社会について、基本概念を捉える。 |
| 第3回 | 概念規定その2 (地理) | ユーラシア大陸について、基本的な地理概念を確認する。 |
| 第4回 | 民族と言語その1 | 民族とは何か、言語とはどのようなものか、社会とのかかわりの中で考える。 |
| 第5回 | 民族と言語その2 | 前回に続き民族とは何か、言語とはどのようなものか、社会とのかかわりの中で考える。 |
| 第6回 | 様々な生業 | 世界中には多様な生業があり、それに応じた生活形態があることを認識する。 |
| 第7回 | 農耕 | 農耕の起源、人々の生活に農耕が及ぼした影響を社会的・文化的視点から考える。 |
| 第8回 | 牧畜 | 牧畜の起源、人々の生活に牧畜が及ぼした影響を社会的・文化的視点から考える。 |
| 第9回 | 遊牧民 | 遊牧民の生活と文化、物資や文化の交流に寄与した様子を見る。 |
| 第10回 | 多文化世界その1 | ユーラシア各地の生活文化を紹介しつつ、多文化世界を考える。 |
| 第11回 | 多文化世界その2 | 前回に続きユーラシア各地の生活文化を紹介しつつ、多文化世界を考える。イスラム文化についても概観する。 |
| 第12回 | 日本文化への提言 その1 | ユーラシア各地の生活文化とのつながりや比較の観点から、日本文化について考える。 |
| 第13回 | 日本文化への提言 その2 | 前回に続きユーラシア各地の生活文化とのつながりや比較の観点から、日本文化について考え、日本を相対化する。 |
| 第14回 | まとめ(1) | 今期の授業内容を振り返り、振り返り、質疑応答を行う。 |
| 第15回 | まとめ(2)または授業内試験 | 授業内試験を行う予定だが、受講生の数によっては定期試験とし、第15回をまとめ(2)に切り替える。 |

地域文化論

文化は人が集まるところに生まれ、育まれ人から人へ伝えられ、何世代にもわたり積み重ねられるものである。人間は言葉や文字という手段を身に付けた。そうした人々の集団が別の人々の集団と出会えば、文化の伝播や衝突が起こり、その結果形態や内容に変化が起こり、新たな集団によって伝承される。この様相を中近東・地中海地域を舞台に見て行く。

【授業の到達目標】文化の様相を具体的な題材を通して検討し、われわれ自身が文化とどうかかわっているのか、これから何が出来るとか、考え気付き、将来の仕事や社会貢献に生かすことを目標とする。またアイデンティティを考える一助とする。

【授業の概要と方法】講義形式で、まず文化とは何か、人間に固有のものかどうか、人にとって何故必要で個人とどうかかわるか考える。その後、文字と書かれたものの意味を考えつつ、文化の伝承と交流のありさまを、古代オリエント、地中海とキリスト教、イスラム世界、東洋と西洋の交流をつながけながら解説する。パワーポイントを使って写真・図版を見ながら、具体的に見ていく。

【授業計画】

| 回 | テーマ | 内容 |
|-----|------------------------------|--|
| 第1回 | テーマの概要と意義① | 文化論の視点から論じる。 |
| 第2回 | テーマの概要と意義② | 前回の内容の続編。 |
| 第3回 | 文化の媒体 | 言葉と文字について考え、文字の発生の様相を最古の文字を例に見る。 |
| 第4回 | 文字という道具① | 絵文字から表音文字まで、文字の発展の様相をたどる。 |
| 第5回 | 文字という道具② | 表音文字の出現と、アルファベット文字への移行を見ながら本来の意味における文字の意味を考える。 |
| 第6回 | 記録が伝えるもの ①：初期の都市生活 | 市民生活の発生を古代オリエントの記録からたどる。 |
| 第7回 | 記録が伝えるもの ②：古代オリエントの人々の世界観 | 古代オリエントの人々の世界観を紹介しつつ、人と自然について考える。 |

10 法政大学キャリアデザイン学部紀要第11号

| | | |
|------|----------------------------------|---|
| 第8回 | 記録が伝えるもの ③古代オリエント の人々の人生観 | 古代オリエントの人々の人生観を紹介しつつ、人が自分をどう考えていたかを見る。 |
| 第9回 | 記録が伝えるもの ④：古代オリエント の人々の死生観 | 古代オリエントの人々の死生観を紹介しつつ、人が生・死・永遠の価値をどう考えていたかを見る。 |
| 第10回 | 時代の流れと文化 交流① | 時代が下り政治的背景をもとに文化交流の範囲が広がる様子を見る。 |
| 第11回 | 時代の流れと文化 交流② | ヘレニズム時代と世界市民主義の発生を見る。 |
| 第12回 | 中近東から地中 海・西洋へ | オリエント文化の影響が西洋世界に及んだ様子を見る。 |
| 第13回 | 西洋世界のルーツ と近・現代のグ ローバル文化 | 西洋世界に及んだオリエントの影響が後世に伝わった様子を紹介し、西洋の相対化について見る。 |
| 第14回 | まとめ | 今期授業全体の振り返り |
| 第15回 | 授業内試験または まとめ(2) | 授業内試験の予定だが、受講者数によって定期試験に切り替え、第15回はまとめ(2)とする。 |

このほか外書講読（旧文化の交流と伝承）については、『キャリアデザイン学への招待』 p. 115に言及したのでここでは割愛する。

2.2 研究活動

在任中の研究活動を著書・論文・学会発表・学術招待講演・海外学術調査に分け、主要なもののみとりあげ概観したい。

A) 著書

- 1) Eiko MATSUSHIMA and Hirofumi TERAMURA, *Brick Inscriptions in the National Museum of Iran: a catalogue*, Ancient Text Sources in the National Museum of Iran, vol. I, Iran-Japan Project of Ancient Text, Nakanishi Printing Co. Ltd, Kyoto, November 2012. Chapter. 1, pp. 2-240

後に述べる海外学術調査（イラン）の第一回の成果報告書である。この学術調査はトヨタ財団の助成を得てスタートし、間もなく科学研究費の助成も得ることになったわけだが、トヨタ財団の助成終了時に合わせ、研究

班として初めての報告書を作成した。イラン国立博物館所蔵の資料のうち、エラム語のブリックの大半を松島が担当し出版した。

2) デジタル図書共同執筆

Art Research Project：試験公開『世界美術全集第16巻・西アジア』（初版2000年2月）、69作品解説について全面的に加筆修正した。前田麻奈デザイン事務所、2012年4月

3) その他

新規の出版ではないが、かつて出版した以下の翻訳書が新装版として刊行された。

- ①ジャン・ボテロ著、松島訳『メソポタミア 文字・理性・神々』法政大学出版社、新装版 2009年8月
- ②ジャン・ボテロ著、松島訳『バビロンとバイブル 古代オリエントの歴史と宗教を語る』法政大学出版社、新装版 2013年8月
- ③ジャン・ボテロ著、松島訳『最古の宗教 古代メソポタミア』法政大学出版社、新装版 2013年8月

B) 論文

『法政大学キャリアデザイン学部紀要』に以下の論文を発表した。

- ①「バビロンのマルドゥク像をめぐる一偶像崇拜とそれに関わる問題点」、第2号（2005年3月）、225-241頁
- ②「メソポタミアにおける文字と思考についての一考察」、第3号（2006年3月）、257-275頁
- ③「古代メソポタミアにおける特定の文字の取り扱いについて」、第4号（2007年3月）、213-226頁
- ④「マルドゥク神のキャリア形成—叙事詩『エヌーマ・エリシュから』」、第5号（2008年3月）、265-278頁
- ⑤「メソポタミアの人々にとっての光と闇」、第7号（2010年3月）、21-35頁
- ⑥「[「神の婚礼」再考に向けての一試論]」、第7号（2012年3月）、429-438頁

このほか在任中に発表した学術論文を以下に公表年次順に列挙する。

12 法政大学キャリアデザイン学部紀要第11号

- 1) 「マルドゥクの「50の名前」の意味について」『オリエント』51/1、pp. 165-180、2008年9月
- 2) 「2語併用世界の文字トリック—『エヌーマ・エリシュ』の注釈書：マルドゥクの50の名前」を例に一」、前川和也編『シリア・メソポタミア世界の文化接触：民族・文化・言語』文部省科学研究補助金・特定領域研究「セム系部族社会の形成」平成20年度研究集会報告、pp. 42-50、2009年3月
- 3) 「天空と人間—古代メソポタミアの場合」、篠田知和基・編『天空の神話—風と鳥と星』pp. 513-524、2009年4月
- 4) 「『エヌーマ・エリシュの注釈書』（マルドゥクの「50の名前」への注釈）概観」『西南アジア研究』No.71、pp1-27、2009年9月
- 5) 《Quelques notes sur l'épisode des "cinquante noms de Marduk》, *Et il y a eut un esprit dans l'Homme*, Jean Bottéro et la Mésopotamie, pp. 55-64, 2009/07.
- 6) 《La lumière et les tenebres dans les mythes mesopotamiens》, Shinoda, C. (ed.) "Mythes, Symboles, Langues vol. II , 55-62, 2009/12.
- 7) イラン国立博物館（テヘラン）の楔形文字資料調査について、前川和也編『シリア・メソポタミア世界の文化接触：民族・文化・言語—文部科学省科学研究費補助金・特定領域研究「セム系部族世界の形成」平成17-21年度研究成果報告、pp. 15-17、2010年3月
- 8) 水の中の火、篠田知和基（編）『水と火の神話 - 水の中の火』、pp. 111-116、2010年
- 9) 「メソポタミアにおける『神の婚礼』問題の展望について」篠田知和基（編）『神話・象徴・言語Ⅲ』
- 10) 「メソポタミアの天空観と神話」『アジア遊学』121号、pp. 36-45、2009年4月 pp.115-126、2010年
- 11) 『神の婚礼』と愛の言葉、篠田知和基（編）『愛の神話学』、pp. 101-110、2011年
- 12) Women who played the role of interceder: Part 1, REFEMA 2nd workshop (June 22, 2013, Tokyo), Blog REFEMA, <http://refema.hypotheses.org/32>

- 13) *hīrtu and kallātu* as titles of wife, Women who played the role of interceder: Part 2, REFEMA 3rd workshop (September 4, 2013, Carqueiranne), <http://refema.hypotheses.org/32>

C) 学会発表

- 1) 「マルドゥクの「50の名前」の意味について」、日本オリエント学会 会 大会（東京・早稲田大学）における口頭発表。2006年10月
- 2) “Ištar and other goddesses in the so-called “Scread Marriage” in Ancient Mesopotamia”, International Conference on Ištar/Astarte/Aphrodite: Transformation of a Goddess, Keio-University, Tokyo, 2011/08/25.
- 3) “Les femmes en contexte cultuel”, Premières journées d’études: les Roles économiques des femmes en Mésopotamie ancienne , Maison de l’Arcéologie et de l’Ethnologie René Ginouvès - Nanterre, France, Nov. 2-3, 2012
- 4) “Transformation de l’être vivant au mort à la Mésopotamie” Pré-session du Colloque international des 8 et 9 Mars 2013 :Mythe, Rites et Funérailles dans les mondes anciens médiévaux et en anthropologie, 16 décembre 2012,Tôyô-bunko (École française d’Extrême Orient à Tokyo)
- 5) “Des vivants aux morts ou la mutation onthologique dans les mythes mésopotamiens”, Mythe, rites et émotions : les funérailles le long de la route de la soie, Colloque international des 8 et 9 Mars 2013, Université Paris 7 Denis Diderot.

D) その他

<学術講演・招待講演>

- 1) *Ancient Iran and Mesopotamia: a Brief Sketch of a Reciprocal History*, National Museum of Iran, Tehran, 2008/09/16
- 2) *Brick Inscriptions in the National Museum of Iran*, National Museum of Iran, Tehran, 2012/08/12

<在外研究期間中における活動>

2010年4月より2011年3月までの一年間、フランスにおいて、CNRS（国立

14 法政大学キャリアデザイン学部紀要第11号

科学研究機関) 招待研究員 (受け入れ研究所はパリ・Ivry 研究所) の身分で在外研究に従事した。この間同学の研究者とさまざまな研究交流を行ったが、その中で3回の招待研究発表を行った。題目は同様であるが、その理由は第一回目が好評であったため、同じ話をそれぞれの高等研究機関あるいは授業でしてくれるよう依頼を受けたためである。

“Quelques problèmes de la cérémonie du mariage divin dans les documents akkadiens”

2010/10/26 CNRS, Ivry

2011/01/ École Pratique des Hautes Études V^e Section, Maison de la France, Paris

2012/02/ Maison de l'Archéologie et de l'Ethnologie orientales, Nanterre

D) 海外学術調査

イラン国立博物館 (テヘラン) における楔形文字資料調査

イラン国立博物館 (テヘラン) 碑文部には、イラン国内の考古遺跡から発掘された楔形文字資料が総計で5000点弱 (概数) が保管されている。これらの資料のかなりの部分はまだ十分整理がなされていない。博物館碑文部主任が日本人研究者に調査を打診してきたため、依頼を受けて松島が2008年8 - 9月にテヘランへ出張し国立博物館を訪問して、楔形資料の予備調査と今後の方針の話し合いを行った。帰国後、研究体制作りを模索し、スーサ、チョガザンビル、ペルセポリスから出土している文書の研究と、所蔵文書を三次元レザースキャナーにより3Dデータ化し世界公開することを可能にするスタッフを備えたチーム作りをし、科学研究費や各種財団研究費を申請し研究を実現する活動が始まった。2009年12月のイラン訪問の後松島は在外研究のためフランスに出兵したが、その間も準備は進展した。

まず2010年10月からトヨタ財団の研究助成金を得て、イラン国立博物館とのMOU 締結交渉が実現し、2011年4月から科学研究費 (海外学術調査) を得て5年計画の楔形文字資料調査・3Dデータ化作業がスタートした。この活動を順調に行い、また発展させるため、松島は別途研究代表者として科学研究費を申請し、2012年度から4年間の助成 (「スーサ遺跡出土の楔形文字資料調査」) を得ることとなった。このような流れの中で、上記に加え2011年度に2回、

2012年度に2回、2013年度に2回、中期または短期のイラン出張を行い、チームのメンバーとともに調査ならびに先方との打ち合わせ・交渉に携わっている。この間の研究成果は、トヨタ財団の研究助成終了時出の報告書として、上記の著書 *Brick Inscriptions in the National Museum of Iran: a catalogue*, *Ancient Text Sources in the National Museum of Iran, vol. I, Iran-Japan Project of Ancient Text*, November 2012として出版された。今後も早い時期にこの続編の刊行を予定し、研究を続けている。

おわりに

以上、2004年の着任以来をざっと振り返ってきた。この十年の間に二度のカリキュラム改訂が行われたこともあって、いささか慌ただしく、担当した授業をそれぞれ納得いくまで掘り下げられたかどうか、疑問は残る。しかし私としては、冒頭にも述べたように、現代に生きる我々の社会・生活・文化のルーツに言及し、名もない人々が積み重ねた歴史に支えられて現代人の生活が成り立っていることを学生に認識してもらうこと、それがキャリアデザインを考える一助になることを願って努力してきたつもりである。十分な成果に至らなかったとすれば、それは力不足によるものであろう。それはそれとして、授業、あるいはほかのさまざまな場面で、学ぶことは多々あった。また、在外研究をはじめとして、研究を発展させる多くの機会を得たことも事実である。このことには深く感謝したい。

今後もキャリアデザイン学部在任中の経験を生かし、自分の研究と自身のキャリアをさらに深く追及するとともに、法政大学キャリアデザイン学部の一層の発展を願ってやまない。